【568】

氏　　名　山下秀智（やました ひでとも）
学位(専攻分野)　博　士　(文　学)
学位記番号　論文博第379号
学位授与の日付　平成12年1月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　宗教的実存の展開

論文調査委員　(主査)教授 長谷正當　教授 薗田　坦　教授 藤田正勝

論文内容の要旨

本論文は，キェルケゴールと親鸞の思想を中心に，宗教的実存への階梯と，宗教的実存に現成する信の内実を考察したもので，序論と四つの章からなっている。

序論では，宗教を人間存在の根本構造ともいうべき二重性に根差すものとして究明する。キェルケゴールは『死に至る病』の冒頭で，人間は精神であり，精神は自己であり，自己はそれ自らに関係するところの関係であり，その関係において，そのような関係を措定した第三者（神）に関係する関係であると規定している。人間存在が自己関係と同時に神関係という二重の関係を有する存在であること，思惑と縁起という二重の有り様のうちで生きる存在であることが示され，絶望と救済，迷妄と覚醒という宗教的実存の二重性が，人間存在の二重性から説明される。

第一章では「宗教的実存への階梯」が考察される。第一節において，真理伝達の方法が問題にされる。キェルケゴールはその主要著作を仮名によって出版しているが，この仮名を用いるという「間接伝知識」の方法が，ソクラテスの「皮肉」の概念とともに，真理の自己化（Tilegnelse）の問題として論じられる。

キェルケゴールによれば，ソクラテスの実存は「皮肉」である。その皮肉の奥底にある肯定的な主張は徹底した無知である。この無知は，ヘーゲルの体系的思惟と比較した場合，全体を洞察することができないということを意味するが，それは歴史的現実の内において決断し実存することを可能にする。全体を洞察できないということが，歴史において決断するソクラテスを生んでいることに，皮肉と宗教的真理の自己化との繋がりが捉えられている。

キリスト教においては，通常の推論によっては入って行けない真理伝達の装置が設定されており（それは一言で言えば，神が人となったという逆説である），イエス・キリストというこの逆説を前にしては，人間の思惑（思枠）は打ち破られざるを得ない。思惑の中で生きる人間の救済は，一筋縄ではいかず，躓きの試練を通り抜けなければならない。愛といえどもこの躓きを取り除くことはできず，愛の意義はむしろ人間をこの躓きに直面せしめ，これらを信仰へと転ぜしめるところにある。

第二節では，「キェルケゴールにおける宗教的実存への階梯」が取り扱われる。宗教的実存の階梯は，一般に「実存の三段階説」と言われているが，これを「実存の三段階説」という概念で締め括るには，キュルケゴールの思想は余りに内容豊富である。本論文において，論者は，むしろ彼の実人生にも立ち入りながら，主要著作の内容を検討しつつ，彼の言う新約聖書のキリスト教への道行を辿っている。これはヒルシュのような研究者の立場を踏躙するものである。彼の父親との関係や，レギーネとの婚約と婚約破棄事件，コルサァー事件などを通して，いかに彼が自分を襲った運命を摂理へと転換していったかの経過が究明される。ここで論者は，時の地平からのみでは，時は充ちないということ，時間を超えた永遠なるものへの関係によって自己が自己となることを，キュルケゴールが自らの苦悩に満ちた実体験の内から自覚していく過程を通して明らかにする。

第三節では，「親鸞における宗教的実存への階梯」が考察され，親鸞における「絶対他力の信」の世界への道行が追求される。親鸞の思想も，実人生の深い体験に裏付けられているが，その真相は大部分が霧のなかにある。したがって，残された著作『教行信証』等から，その階梯の大筋を辿る他ない。

本節の最初において論者は，真理伝達の二重性の問題を，「顕彰隠密」の概念によって考察している。主体的な自己化（Tilegnelse）を要求する真理が二重性を必要とすることは，当然，仏教においても想定されなければならない。例えば，釈尊の対機説法や禅の公案などにそれが伺われる。しかし，仏教においてそれが主題的に論じられたものとして，本論文では親鸞のいう顕彰隠密の概念が考察される。

第二章は，「回心」によって行き着いた宗教的現実そのものを問題としている。それを本論文では「自覚B」という概念によって考察している。論者は自覚に二種類を設定し，宗教へ向かって思惑（思枠）の内を転々とする，自己関係としての在り方を自覚Aと呼び，神とか如に繋がった時に現成する自覚の在り方を自覚Bと呼んでいる。

自覚Bは自覚Aを量的に積み重ねて出てくるものではなく，自覚Bは，超越的な神とか如とかいった存在そのもののはたらきに触れるところに現成する。その意味で，自覚Bは，それを通じて神とか如が自らを現実化することでもある。人間存在の根底であるものを人間が自覚することは，その根底が自らを現実化することでもある。自覚Aは絶望や苦悩の根源であるが，その絶望や苦悩を通して，絶対者は自らを現実化するのであって，その意味からすれば，自覚Aも大きな意義をもってくる。根底の自覚が，人間が自己の根底を自覚するのみならず，根底そのものが自らを覚するという形で現実化するのである。

第一節「自覚について」は，西田哲学や唯識思想に触れながら，根本的には人間存在の二重性について論証しようとしている。思惑（思枠）の内に転々とする人間の在り方と，そのような在り方そのものを支えている，神とか真如とかいった根底を際立たせようとしている。そして，両者の間に質的な差異を置きつつ同一が問題となるのは，自覚Bの立場からであること，自覚Bは思惑（思枠）の内から成就するのではなく，絶対の根底からであること，さらには，自覚Bは固定的に成就して終わるのではなく，「既に」（schon）の次には「未だ……ない」（noch nicht）が続くこと，等が論じられる。最後に自覚Aと自覚Bの質的差異と連続の問題が，ハイデガーの哲学と比較しつつ論じられている。

第二節「根底の自覚－キェルケゴールと唯識思想」では，特に自覚Bが絶対者の方から成就するということが，キェルケゴールの絶望の分析と唯識思想の四分説を関連させながら論じられる。

第三節「根底の自覚－『教行信証』をめぐって」は，自覚Bを，親鸞の三願転入の考えと三一問答において考察している。すなわち，「化身土巻」の三願転入の内容を，自覚が無限の展開をして，その根底に至ろうとするプロセスとして考え，「信巻」の三一問答を，根底そのものが自らを実現するための具体的展開として解釈している。このような論述からして，論者は，三願転入が親鸞に起こった歴史的時期を確定することは不可能ではないとしても，自覚は無限であり，ダイナミックな運動を繰り返すはずだから，廻心の時期を固定化する必要はなく，また固定してはならないと主張する。

第四節「自覚と言葉」は，特にハイデガーと西田の言語論を取り上げる。自覚Aと自覚Bの間に質的な飛躍を置こうとする本論文の立場から，論者は西田哲学やハイデガーの哲学において，連続と非連続の関係が曖昧であることを指摘する。

第三章では，特に親鸞の宗教世界を，自然と浄土というテーマから考察する。第一節「親鸞における自然」では，業道自然，無為自然，願力自然という三つの自然について，それぞれの内容とそれらの関連を考察する。業道自然は，人間の迷妄に支配された有り様を表すものであって，対象化されたり，客観的な法則のように受け取られてはならない。したがって，思惑（思枠）の内でのそれの理解は誤解となる。業道自然の体得は，願力自然と相即した形でしか可能とならない。又，無為自然に関しては，それは願力自然との関連で初めて無為自然として現実化すること，そして願力自然は無為自然を根底とすることによって初めて願力自然としてありうることを論者は主張する。この三つの自然の間にある弁証法的な関連を論者は，曇鸞の『論註』における「広略相入」ないし法性法身と方便法身の連関についての論述を踏まえながら論じている。

第二節「浄土の風光」においては，いわゆる浄土の概念の原風景を，論者は『スッタニパータ』の言葉を取り上げ，次いで曇鸞の『論註』の二十九種荘厳に言及しつつ，思惑（思枠）を打ち破った，生きたいのちの働きの世界として捉えている。

第四章は，これからの宗教哲学の課題がどの辺にあるかを考察したものである。曇鸞の「千歳の暗室」の譬えと，キェルケゴールの『不安の概念』を素材に，移行と瞬間の概念が問題にされる。移行については，ヘーゲルが論理学などで扱っているが，そこには真の生きた運動がないことをキェルケゴールは批判する。キェルケゴールは，体系内の運動が仮装した運動でしかないことを指摘したフォイエルバッハの同様な主張を援用しながら論述している。また瞬間の概念はキェルケゴールがその生涯を通して思索したものである。そこにおいて問題となっているのは「無精神性の不安」，「運命として弁証法的に規定された不安」，「責めの観点において弁証法的に規定された不安」という三つの不安の形態である。不安の問題を考察

しつつ，本論文で論者は，無精神性の不安こそ現代にもなお通じる不安であり，現代社会の根本的な病根として捉えている。主体性，精神，自己が無いところでは，直ちに盲目的崇拝が蔓延するからである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，キェルケゴールと親鸞の思想を中心に，宗教的実存への階梯，および宗教的実存に現成する信の内実を究明することを通して，宗教的実存の展開を考察したものである。

本論文において論者が，宗教的実存の展開を考察する際の基本的な視点としているのは人間存在の二重性であり，この二重性をもとに絶望と救済，迷妄と覚醒という宗教的実存の二重性を解明している。人間存在の二重性を，論者はキェルケゴールの『死に至る病』の冒頭における「精神としての自己」の規定を手掛かりにして分析する。人間は，自己自身に関係する関係において同時にその関係を措定した第三者と関係するというキェルケゴールの自己の規定は，自己関係がその根底に他者との関係を秘めていることを述べているが，論者はこの二重性をキェルケゴールの視点を超えてさらに拡大し，人間が主観的な思惑のなかにありながら，真如や縁起の世界のうちで生きているという有り様を指し示すものとして，「人間の実存」とその「根底」との関わりの二重性として規定する。本論文の主眼は，絶望と救済，迷妄と覚醒という宗教的実存の二重性，あるいは迷妄から覚醒へと至る回心の過程を，そのような人間存在の二重性という観点から究明することにある。宗教的実存に現成する信の複雑で微妙な様相に注意をしつつ宗教的実存の展開を追求した本論文は，親鸞とキェルケゴールという異なった伝統のもとにある思想家を扱いながら，伝統の特殊性を超えて宗教的自覚に含まれる普遍的な構造を取り出したものとして大きな意義を有する。

本論文における注目すべき独創的な知見として次の諸点があげられる。

第一は，宗教的真理の自己化をめぐる問題である。キェルケゴールはその主要著作を本名ではなく仮名で出版しているが，キェルケゴールがとったこの伝達の方法は「間接伝達」と言われ，この仮名と間接伝達という方法をめぐってこれまで多様な議論が展開されてきた。論者はこの間接伝達という方法を「宗教的真理の自己化」という観点から追求し，さらにソクラテスの「皮肉」の概念との繋がりにおいて論じている。キェルケゴールによれば，ソクラテス的実存は「皮肉」である。皮肉という否定性の底にある積極的な主張は無知であるが，その無知はヘーゲルの体系知に見られるような全体を思惟することの不可能と引き換えに，かえって歴史的現実の内において決断することを可能にする。論者はそこに間接伝達という性格をもった宗教的知の固有性を捉える。こうして論者は，間接伝達という方法を「宗教的真理の自己化」という角度から追求することで，宗教的真理の生命を歴史的状況との関わりのなかで捉える「弁証神学」の核心にも連なるところを見いだし，さらに仏教における真理の自己化とも結び付けて捉えている。釈尊の対機説法や禅の公案や仏教の方便という考えは間接伝達という方法を暗黙のうちに想定しているが，論者は，親鸞が『教行信証』の「化身土巻」において追求した「三願転入」において現れている「顕彰隠密」という考えのうちにこの問題が主題的に論じられていることを明らかにする。

第二。宗教的実存への階梯として，キェルケゴールが美的・倫理的・宗教的段階として捉えた「実存の三段階」は，親鸞が「三願転入」において取り上げた第19願・第20願・第18願という三つの願に対応するところを有し，この実存の三段階説は人間の宗教的自覚の普遍的構造を明らかにするものといいうる。論者は一応この見解に立って宗教的実存への階梯を追求しているが，しかし，この「実存の三段階説」という概念で宗教的実存の展開を締め括ることからくる抽象性を避け，キェルケゴールの実人生にも立ち入って，彼の父親との関係，レギーネとの婚約と婚約破棄事件，コルサァー事件などを通して，彼が自分を襲った運命を如何に摂理へと転換していったかを見ることから，彼のキリスト教への道行つまり「宗教的実存への階梯」を辿っている。これはヒルシュのような研究者の立場を踏襲するものであるが，このような立場から論者は宗教的実存の三段階説のもつ抽象性を補っている。

第三。論者は宗教的自覚の二つの形式を設定し，宗教へ向かって思惑（思枠）の内を転々とする，自己関係としての自覚を自覚Aと呼び，超越的実在者に触れたところに現成する自覚を自覚Bとして捉える。そして，自覚Bを宗教的自覚のより深められた形として捉え，その特質を明らかにする。即ち，自覚Bは自覚Aを量的に積み重ねて出てくるものではなく，超越者の方から成就されるということ，しかし，自覚Bは固定的に成就して終わるのではなく，「既に」(schon) の次には「未だ……ない」(noch nicht) が続くこと，「既に」と「未だ……ない」との相即として成立するものであることを明らかにする。

第四。論者は自覚Ｂの内容を「自然」の問題との連関において捉え直している。親鸞は自然の三つの有り様を区別してそれぞれを業道自然，願力自然，無為自然と名づけているが，論者はこの三つの自然を深い弁証法的な関連のうちにあるものとして，曇鸞の「広略相入」つまり「方便法身」と「法性法身」との相互連関から考察している。

宗教的信の内実を自己の実存の根底の自覚として掘り下げた本論文は，超越者からの働きに重点をおくいわゆる他力の信の構造と特質を解明したものとして大きな意義を有する。

ただ，本論文中いくつかの用語に関してやや俗流的見解にもとづく使用が散見せられ，今すこし専門的基礎づけがあってしかるべきと思われるが，しかし，この点は本論文の論旨や主張内容を損うものではなく，今後の改善を望みたい。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999 年 12 月 17 日，調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。